

ほんのたまごミニコミ紙

miniたま (みにたま)

2020.1 第108号

鹿子振袖の梅樹

2020年になりました。ゆっくり話題の本でも読みたいと思
い、2019年ベストセラーの一覧を眺めてみました(2018
年11月25日〜2019年11月23日、日本出版販売調べ)。
総合部門ベストテンは以下の通りです。

① 一切なりゆき ② おしりたんてい かいつとねられたはな
よめ ③ 樹木希林 120の遺言 ④ 医者が考案した「長生きみそ
汁」 ⑤ 新・人間革命(30・下) ⑥ メモの魔力 ⑦ 妻のトリセツ ⑧
日本国紀 ⑨ FACTFULNESS ⑩ そして、バトンは渡された

2018年9月に亡くなった樹木希林さんの遺した言葉を集め
た本が1位と3位に入りました。読者層はともに、当初は60歳
代の女性を中心だったようですが、その後、20歳代から80歳
代まで、幅広い世代からの支持を受けているとのこと。昨年暮れ
の時点で①は150万部、③は70万部に達しています。

樹木希林さんの本と対照的なのが、9位にランクインした硬質な
ビジネス書でしょう。「一見共通点はないが、メディアやネット
に様々な価値観があふれ、フェイク情報に踊らされることもある
今、信頼できる人の信念や流儀に触れたい気持ちと、思い込みを
排除して統計データから物事を読み解きたいという思いには、重
なる所もある気がする」と、作家の朝比奈あすかさんは鋭い分析
をしています(2018年12月16日付読売新聞首都圏版夕刊
より)。



発行 ほんのたまご

メールアドレス nasuka@hontama.com

著作権は放棄していません
本紙に掲載されている画像・文章の
無断転載を禁止します

たまたま本の話

第108回 達人が読み解く「人情紙風船」

池波正太郎

「人情紙風船」(1937年、P. C. L制作)と言えば、名匠・山中貞雄監督の遺作にして日本映画史にさん然と輝く傑作である。この作品を残して戦地に向かった山中は、その翌年、戦病死した。わずか28歳という若さだった。

ストーリーは有名だが、ウィキペディアを基におさらいしておく。以下、内容に触れているのでご注意を。江戸の貧乏長屋で浪人の首吊りが発生、役人が調べに来る。長屋の住人である髪結いの新三は、長屋の連中で浪人の通夜をしてやろうと言い、大家を説き伏せて酒をせしめ、馬鹿騒ぎを行う。

同じ長屋にいる浪人の海野又十郎は、父の知人の毛利三左衛門に仕官の口を頼みに行くが、邪険に扱われ相手にしてもらえない。その毛利三左衛門は質屋である白子屋の店主の愛娘・お駒をさる高家の武士の嫁にしようと画策している。しかし当のお駒は番頭の忠七とできている。

新三は自分で賭場を開いていたが、ヤクザの大親分・弥太五郎源七の怒りを買って散々な目に遭ってしまう。そのせいで金に困り、髪結いの道具を白子屋に持ち込むが相手にしてもらえない。海野又十郎は、懲りずに何度も毛利三左衛門に会いに行くが、ある日どしゃぶりの雨の夜に「もう来るな」と言われてしまう。同じ日の夜、忠七が店へ傘を取りに戻っているのを待つお駒を見かけた新三は、彼女を誘拐して自分の長屋に連れ帰ってしまう。

白子屋の用心棒をしている弥太五郎源七を困らせるためだ。

誘拐を知った白子屋は、嫁入り前の大事な娘を、と源七らを使って長屋にお駒を引き取りに来るが、新三は源七らを追い返してしまう。その後、大家の計らいで、お駒は無事に白子屋へ帰され、大家と新三は50両の大金を得、宴会をする。誘拐の片棒を担いだ又十郎も分け前の金を貰って宴会に行くが、真面目だと思われていた又十郎の行為に長屋の女房たちは良い顔をしない。それを知った妻のおたきは又十郎を刺殺し、自害する――。

どこをどう突ついてもスキのない傑作であるが、この映画について池波正太郎(1923-1990)が興味深い指摘をしていることを知った。池波は「鬼平犯科帳」「剣客商売」などで知られる時代小説の巨匠だが、とてつもないシネマディクト(映画狂)でもある。山中演出のうまさにも舌を巻きながらも、「人情紙風船」の設定にはずいぶん無理があるという。指摘するのは主に次の3点。引用は「池波正太郎のフィルム人生」(1983年6月、新潮文庫刊)より。

①質屋の娘が、どこかのご家老の倅(せがれ)に嫁入りするなどという話は無茶苦茶だ

「もしそうだとしたら、あの質屋はもっと立派でないといけない」と、池波は指摘する。あそこは奉公人が何人もいないような質屋だし、質屋ではそもそも限界がある。「だから、ものすごく大きな呉服屋で、小さな大名家に金でも貸しているというようなシチュエーションにして、その家老の倅に娘を嫁にやるということにでもすればまだしもだった」。言われてみれば確かにその通り。階級社会の中ではありえない話だろう。

②最後の海野又十郎を女房が殺害するところ、あそこも

おかしい

「短刀を抜いて刺し殺すだろう、亭主が酔っ払って寝ているところを。どこをどう刺したにせよ、殺されるほうは叫び声を発しなくてはならない」と、池波は指摘する。いかに武士の妻とはいえ、武芸の達人ではない。男も気を失っているわけではなく、酒に酔って寝ているだけだ。「そこを刺し殺すのに、壁のつき抜けの長屋で、叫び声一つまわりに聞こえないで翌日の昼までわからないなどというのは、あり得ない」。

③新三が質屋の娘をひっそらってくるのは意地だけでそうするんだ、映画では。そこが弱い

「元来は、金づくでやるという話を、そういう風に変えた。だから迫力が薄くなっちゃうんだ」と、池波は指摘する。つまり動機が弱い。「金づくでなく意地だけというのであれば、もっと何らかのやりかたがあると思う、娘をひっそらうという以外に。ここらあたりに山中のスマートさと同時に物足りなさみたいなものが出るわけだ」。

「人情紙風船」は河竹黙阿弥の「髪結新三」という芝居が土台になっている。「芝居では、新三がひっそらってきた娘を犯してしまうのだからね、その上で何食わぬ顔して返してやって金を取るんだから」。したがって新三というのはいい男でなければならない。芝居だったら中村翫右衛門は新三の役に合わないが、映画ではむしろスマートな翫右衛門で良かったのではないかと、とも池波は語る。「あれで金づくの、女を犯すの、という悪い奴になったら汚く見えてしまうからね」。

以上――日本映画史上屈指の傑作も、シネマディクト池波にかかってはすっかり形無しである。さすがに時代劇の巨匠は映画批評の達人でもあって、その着眼点はきわめて鋭い。(こや)